

今日もまた転がる

床上手な天女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こいしちゃんを主人公にした。

目次

今日もまた転がる

1

今日もまた転がる

「おねえちゃん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

ずっと書類と睨めっこしてる。私が目に入らないほど熱中してるんだなあ。

「おねえちゃん」

今度は肩に手を置くけど、にべもなく払われた。よっぼど大きな仕事なんだろうなあ。邪魔しちゃ悪いよね。

「行ってくるね」

扉が開いたことにも気づいてないみたい。いや、私が開けたからかな。

「おりん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

おうとお喋りするのに夢中で、私が目に入っていないんだなあ。

「おう」

おうにも呼びかけたけど、やっぱり答えは無いなあ。二人ともお喋りが好きだも

んね。

二人とも笑ってる。二人が楽しそうであった。

「ばいばい」

別れ際に手を振ったけど、全然気がついてないみたい。当たり前だよな。

「橋姫さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

ずっと河の流れを見てる。誰かに嫉妬してるんだろなあ。いいなあ。

私も誰かに嫉妬されたい。誰か私のいい所見つけてくれないかなあ。

「ねえ、何かないかな？」

私のいい所。橋姫さんに聞いてみたけど、何も言わなかった。

まあいいか。きっと他の人のいい所を見つけるのに忙しいんだよね。

「鬼さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

皆と楽しそうに飲みあってる。本当に楽しそうに。

「鬼さん」

もしかして皆の声が煩くて、私の声が聞こえてないのかな？
でもいいか。ワイワイやってるから、水差しちや悪いよね。

「蜘蛛さん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

これから地上に行くみたい。何しに行くんだろう。

私もついて行ってもいいのかな？

「一緒に行ってもいい？」

「まほう使いさん」

呼びかけるけど、なんにも答えてくれない。

前に会ったことがある人だけど、今は勉強中だからかな。

私が此処にいること、判ってくれないや。真剣にやってるんだなあ。

私もあんなに集中して出来るようなものが欲しいなあ。

「みこさん」

「あら、いっしょっ？」

気づいてくれた。嬉しいなあ。

「あんた、地底帰ったんじゃないの？」

「えへへー、出てきた」

「出てきたって……地底の奴は来ちゃ駄目だったのに」

やれやれ、つて溜め息を吐くみこさん。でも呆れてるだけで追い出そうとはしてない。解るよ。

私だつてさとり妖怪だもん。心は読めなくても、解る。

「何食べたい？」

「なんでもいいよー」

「じゃあ適当にするわ」

「はーい」

ほらね。

みこさんは無意識的に私を気にかけてくれる。もしかしたら、私が此処にきた理由はそれだったのかも。

あれ？

私、いつの間にか能力使っちゃってたのね。だから皆気づかなかつたんだなあ。

うっかりしちやつてたなあ。

「はい」

「ありがとうございます！頂きまーす！」